小田原俳句協会報

理事会だより（1・14オービックビルにて）

一、立春句会は、新型コロナに対する政府の緊急事態宣言発出に伴い、この間の全行事中止との主催の観光協会通知を受け、短冊吊し・句会共に中止と決定し、その旨をグループ経由及び会員宛チラシを一月号会報に添え通知する。

二、梅まつり俳句大会の今年度の名称を、観光協会より「令和2年度小田原梅の里さんぽ俳句大会」に変更する旨の通知があった経緯につき会長から報告あり承認。当協会としては梅まつり俳句大会回数にはカウントすることに。なお今年の投句は173名262組と前回を上回った。

三、定期総会（4月22日）に向け二月理事会に各部素案の用意と、会員（数）の動向確認。

四、市制80周年の当協会への表彰につき会長から表彰状・記念品（寄木細工の盆、市制80周年ＤＶＤ）が披露された。

「俳句おだわら」10句抄（641号より）

大石和子　抄出

曼陀図も工場夜景も石榴もか　佃　悦夫
うそ寒や唯一の被爆国なれど　青木たけを
人はみなけふも旅びと鳥渡る　神山つとむ
巣籠りの飯炊（いい）きをれば初時雨　寶子山京子
大袈裟に逃げて又来る稲雀　飯田　愛
憂国論湯豆腐の角崩れゆく　小野　菊土
養生の一念ゴーヤ苦きかな　山口安規子
秋蝶や一茶の句碑に翅たたむ　北崎　修
鳥渡る羽一枚の遺言状　小林永以子
立冬やトランペットがはじまると拍手　瀬戸　正洋

近藤久江　抄出

照り翳るたびに色変へ芒原　陌間みどり
人はみなけふも旅びと鳥渡る　神山つとむ
付き添ひも共に老ひしや冬帽子　若村　京子
北条の城の遠眺天高し　田中　幸子
追伸と書いて林檎をひとかじり　中山　妙子
静寂（しじま）なる京の書院や紅葉晴　高橋　正子
サッカーの少年の声冬青空　鳥海　壮六
八手咲く箱根古道九十九折　村場　十五
晴ればれと海の膨らむ蜜柑山　新井たか志
十月桜雲ひとつなきけふの天　山田　照子

年間ベスト一句集

立春大吉大黒さんにおくどさん　青木　孝子
冬木立幼馴染のごと在りぬ　青木たけを
旧道や夕日ころがる柿の坂　青山　典子
天狼星胸に布石の一語かな　秋山　昇
花芒風になり切る風の貌　足立　和子
白鳥の切りなく使ふ水鏡　新井たか志
田の神の眠りをさますつばくらめ　飯田　愛
富士と呼ぶ山がここにも旅始　池田　忠山
朝桜眩し声待つ校庭に　池田　令子
冷めし紅茶曖昧模糊の雪催　石井きよ子
病院へエール歳末の電飾　石井千代子
干しかごのピール半生夏はじめ　石田加津子
幻想のヴィオロンの音よ冬薔薇　石田　和代
流星のきらめき胸へおさめけり　板谷　雅泉
床の間に春着預けて床に就く　市川めぐみ
春雪や甘酒茶屋の小座蒲団　市川　好子
女正月少し明るき紅をさす　一ノ瀬茂代

俳句おだわら（1・19〆切り、到着順）

◆鹿火屋（12・18）　久江報

煤払ひ消えて無くなる悔一つ　足立　和子
尊徳の夫婦の像へ冬日燦　川本　育子
冬ざれや馴染の猫の素つ気なく　高橋　小糸
山の端に師走の月のかかりたり　山﨑　悦子
水仙にうすき陽こぼれ香の白し　近藤　久江

◆山北（12・17）　由里子報

越後いまモノクロとなり年を越す　尾崎　竹詩
トーチカに火が入り列車空へ発つ　中山　妙子
黙読のひとり笑いや日向ぼこ　和田恵美子
窓際の雑誌の束や冬の蜂　石田加津子
勤労感謝洗う側から拭くお椀　尾崎　幸子
冬木の芽まだまだいける明日がある　柳川　楊雨
冬木立青春の意気秘めて立つ　高橋　秋月
呉服屋の長き暖簾や雪中花　竹下由里子

◆開成（1・7）　ちわき報

町中の氏神様に初詣　濱本　主雄
イヤホーンより交響曲や暮早し　遠藤シヅ子

鳥帰る潮の流れに沿ふやうに　伊藤はる子
一輪の竜胆だった池内淳子　伊藤　道郎
風光る棹一本の川下り　乾　利子
家族への語りべとなる終戦日　井上　和子
孫曾孫に囲まれ良夜誕生日　井上　良子
銀杏落葉少女たちは靴をぬぎ　岩楯惠津子
落椿かすかに音の残る土　岩本ひさみ
縫物に励む尼さまなつめの実　植松テル子
数歩ごと背伸びしてみる田草とり　宇田川聖一
朧朧の明日を想はず葛湯ふく　内田知江子
召人の声おごそかに寒明くる　遠藤シヅ子
梅林を走りぬけたる天才達　大石　和子
象亀となって鳴いてる元旦かな　大石　雄介
駄菓子屋のあかるきわらひ猫じやらし　大木　敬子
湧水に砂を巻上げ春を待つ　大沢　年子
小時飯を広げし畑や揚雲雀　大島美恵子
行く春や畑の道も人集う　大塚　行人
新米やぽろりと落ちる鬼の角　岡田　典代
滝は父滝壺は母罅あまた　岡本　史郎
稲の香は父母の匂ひと重なりし　奥津ちわき
ひとり逝き糸瓜がぶらりぶらりかな　尾崎　一夫

水仙に風きて今日の新しく　下澤　操子
除夜の鐘数へ半ばで夢の中　奥津ちわき

◆青梅（1・13）　幸子報

初便り家族の幸を届け来る　大塚　行人
満天に寒天さらす漢かな　湯本とし子
七草や一廻りする寺の庭　加藤まり子
野にひびく程の嚏（くさめ）や畑仕事　久保寺トミ子
枯木山一景となし湯治かな　田渕　令子
はや三日軽く早めの夕餉かな　田中　幸子

◆香雨・梅ごち（12・20）　忠山報

再会のよろこびに似て返り花　肥後ちさこ
花八手母亡き家の台所　関戸わよこ
かぐや姫ゐさうな竹や小六月　青山　典子
終ひ湯の湯舟あらふて除夜の鐘　門松　鳳文
七曜表はづしすなはち年惜しむ　乾　利子
キャンドルを灯しこれよりクリスマス　吉田　百代
ゆふばえに溶けてしまふか返り花　吉田　康雄
ぬひぐるみめく幼児（をさなご）の冬帽子　陌間みどり
歌ひ手も指揮者も白衣クリスマス　小澤　純子
やまびこの還（かへ）るに間合ひ山眠る　池田　忠山

◆ころよぎ（1・14）　つとむ報

若葉萌ゆ飛び箱越しの高き声　尾崎　幸子
人類は進化の途中冬銀河　尾崎　竹詩
明け方の部屋に残り香月下美人　小澤　純子
遮断機の向うの顔も師走かな　小澤　園子
草庵を出山頭火霧の中　小野　菊土
蜩や過ぎゆく時を遠く聴く　香川　花子
宴会の声も聴けずに花は葉に　風間　秀泰
松過ぎの玄関二人だけの靴　片野　秋子
学童の傘に窓あり初時雨　片野　節子
初時雨訪う人もなき一日　勝木　澄子
赤とんぼ岩稜の風胸に受く　加藤　幾代
柿熟れる人は未完のまま老いて　加藤かほる
太宰忌や部屋に干したるシャツズボン　加藤　健治
葉牡丹や老いは静かに本音秘す　加藤　幸子
柚子ひとつ茜の空に昏れのこる　加藤　富江
新日記余白豊かに埋めてゆく　加藤　春江
伽羅蕗の大鍋仕う山の寺　加藤まり子
「また来るね」師走の墓を去りにけり　加藤れい子
何もかも兄が教師の夏休み　門松　鳳文
人はみなけふも旅びと鳥渡る　神山つとむ
誂えたように一輪寒椿　川合　昌子

切り通し抜けて広がる大晦日　板谷　雅泉
浮寝鳥朝日さし込む橋の下　植松テル子
極月や木々ほつそりと静もりて　神山つとむ

◆春野（12・20）　きよ志報

松籟に鷗一団乱れなき　秋山　昇
裸木にすがるごとくの夕日かな　伊藤はる子
死ぬ順序くるうてゐたり日向ぼこ　尾崎　一夫
ひりひりと冬青空のひろごれる　瀬戸　悠
山茶花のほろほろと散り黙深し　内田知江子
山茶花が世間話を聞いてゐる　二見　和江
鳰潜れば明日が見えますか　長谷川きよ志

◆沈丁（1・9）　文子報

履物を平たく揃へ女正月　寶子山京子
韋駄天に遅速のありぬ三日かな　牧石美千雄
淡くぬるマニキュアピンク女正月　若村　京子
大寒やカンカンカンと夜が鳴る　柳澤ミサ子
日溜りに座布団並べ女正月　田中　恵一
女正月有隣堂でお茶の本　河本　純子
十歳に言い分のあり女正月　瀧本　敦子
千両がたわわに実り良い予感　勝木　澄子
甘すぎる夫の珈琲女正月　菅野　英余

英字紙につつまれスイトピー真紅　川本　育子
新たなる米一粒も神の愛　河本　純子
街路樹の朝の葉擦れや夏来る　北崎　修
列島の骨格ならむ稲架を組み　北村　文江
遺されて老いて夏草茂らせて　木村　和彦
鼈甲飴の鬼の足形春近し　木村　幸枝
再訪の宅配人にソーダ水　木村美千代
迫り来る百のひまわり風に揺れ　久津間百合子
地下足袋の足どり軽き今朝の秋　久保寺トミ子
武者ぶるひしたる金魚の宀（やまいだれ）　小島ノブヨシ
年の暮れ忙し忙しとみな笑顔　小瀬村信子
ひとり居の兄の晩酌青葉木菟　小林永以子
初任地に母訪ね来し桜かな　小林　環
今日はけふばかりの命沙羅の花　小宮　早苗
金婚に孫子十人暖炉燃ゆ　近藤　絢子
光り合ふ小さき言葉や木の芽吹く　近藤　久江
張り替へし障子明りに木木のこゑ　西賀　久實
爽やかや巫女の褌（ちはや）を風の透く　齊藤　桂
おぼろ夜のかすかな軋み長廊下　斎藤　静
梔子の白きに勝る香りかな　坂入清四郎
山の夕立あしたが見えるように来る　佐々木重満

掃除ロボ動き回って女正月　高井　幸子
茜雲おだやかに過ぐ女正月　片野　節子
女正月厨の夫（つま）の一人ごと　中野　文子

◆みなみ（12・26）　かほる報

大根煮る円周率のうやむやに　加藤　健治
茶の花や老いても娘には従わず　加藤れい子
初詣階上る夫婦下駄　村上　龍山
お地蔵さんマスクつけられ村外れ　加藤　富江
手袋の中に入れある乗車券　加藤　幸子
アルバムに時を忘れる煤払い　豊田　幸枝
太陽がせかせか回り冬座敷　市川めぐみ
数え日と言いつつ今日も暮れにけり　小瀬村信子
実千両渡り廊下に日の温み　斎藤　静
霜柱踏めば地球の軋むかな　飯田　愛
霜柱ニュースは罹患の棒グラフ　加藤かほる

◆実のり（1・14）　たか志報

くまもんと握手しました獏枕　岩本ひさみ
身を寄せて屋根一列に寒雀　杉本　久子
四日はや歯科検診に名を呼ばる　木村　幸枝
七種や箸柔らかく使ひたる　新井たか志

◆たけのこ（1・14）　悦女報

青焼きの間取り図古りぬ法師蟬　佐宗　欣二
すべてを知っているような吾亦紅　佐藤　正子
大空は雲の遊び場野にあそぶ　澤口　文子
青春や白馬に望む雲の峰　下澤　操子
墨糸の打たれて香る寒さかな　庄司　下載
走り梅雨返品します布マスク　菅野　英余
猫が貌洗ふ風鈴しまはむか　杉崎　せつ
休校の校庭百のこいのぼり　杉本　久子
黒揚羽ふわり時間を踏み外す　杉山あけみ
新酒とてもてなす杜氏秋田弁　鈴木久美子
風光る小犬の首輪あたらしく　須田　聡子
べつ甲の祖母の帯留盆の月　須田　晴美
枝々の切絵さながら冬茜　関戸わよこ
自転車に乗つて買物夏帽子　関根　琉子
苛酷な寒月頓坐するペリカン　瀬戸　正洋
チューリップ色を消す風戻す風　瀬戸とみ子
夏野行く馬の鬣りんりんと　瀬戸　悠
手もて拭く窓の曇や開戦日　瀬戸　りん
星飛んで北嶺息を抜きにけり　芹澤　常子
風薫る一鍬ふつて一休み　高井　幸子
行く秋や庭に根付きし高野槙　高橋久美子

海鵜二羽冬の波間に戯れり　三木　泰子
初場所や応援力士の姿なし　徳田　公子
日向ぼこもしもの時の話しなど　小宮　早苗
朝茜一指揺るがぬ冬菜かな　久津間百合子
山の端に去年の月置く初日の出　宮崎　悦女

◆おほゐ（1・15）　昌男報

空仰ぎ明日を指差す冬木の芽　廣田　悦子
正月をオンラインして祝いけり　二上　光子
初護摩や結界を切る細き指　石井きよ子
無言劇演ずるだけの冬の川　石井千代子
何もかも忘るる君の初えくぼ　小野　菊土
初富士に心無にして祷りけり　香川　花子
筆始め平和平和と重ね書き　風間　秀泰
「あなた誰」修正無用の初笑い　加藤　春江
大寒の空をくすぐる大銀杏　瀬戸とみ子
コロナ禍の籠の鳥なる去年今年　高橋みどり
一病を持って息災初日の出　中津川晴江
初山河雲百態をあそばせて　中根登美子
初日の出心音聞こえそうな宇宙（そら）　中村　昌男

◆鷹（1・8）　十五報

呼び込みの日本語をかし裘　青木　孝子

ざぶざぶと流る川岸芭蕉林　高橋　小糸
冬木立青春の意気秘めて立つ　高橋　秋月
艶めきし大黒柱薺打つ　高橋　正子
年重ね思い重ねて実むらさき　高橋みどり
行列の蟻の先にはきっと空　瀧本　敦子
ものの芽や卵ボーロのような姉　竹下由里子
星合の発車ベルしてななつぼし　田下　昌人
白雲の北に立ちけり夏惜しむ　田中　恵一
かなかなや山のホテルのミルクティー　田中　幸子
泥葱を一皮剝けば無罪なり　田畑ヒロ子
こほろぎや納屋の大甕捨てちまを　田渕　令子
萬緑へおっぱいいっぱい続くなり　佃　悦夫
冬波のへの字への字や辺野古沖　出澤　洋子
吾子の忌や一際明き秋の星　徳田　公子
せせらぎや肺の中まで青葉風　豊田　幸枝
図書館に海の風来る帰燕かな　鳥海　壮六
春立つや心写さぬレントゲン　中田　笑子
蝸牛自問自答の筋残し　中津川晴江
日焼子のまなこ一途に日記書く　中根　和子
八月や過去と未来の交叉点　中根登美子
羊かんに金魚の赤や京老舗　中野　文子

移されし大樹よ冬の深ねむり　池田　令子
かの林泉（しま）の落葉踏みたき足裏かな　西賀　久實
露寒や肩凝りさうに鷺佇てり　佐宗　欣二
指貫の親しき歪み冬麗　須田　晴美
分校のチャイムはピアノ山眠る　中田　笑子
図書館の灰と灯ともす街師走　百川　秀子
月一に通ふ眼科や日脚伸ぶ　山﨑美知子
牛鍋や果つることなき書生論　庄司　下載
口笛に犬を呼びたる枯野かな　瀬戸　りん
春待つや爪立ちて拭く連子窓　高橋久美子
初写真二人暮しとなりにけり　中山智津子
生コンの工場盛ん山眠る　齊藤　桂
沈む日に紫紺の山や牡丹鍋　芹澤　常子
夕鴉声を捨てゆく冬田かな　畠　梅乃
出刃庖丁桶に漬けある師走かな　山口安規子
寒鰤の切身を厚く弁当屋　市川　好子
近松忌江戸指物の姫鏡台　大島美恵子
境内の冬日溜りや紙芝居　田下　昌人
嘘に手紙書き終ふ夜更かな　中根　和子
老僧の物知り顔や十夜粥　高橋　正子
寒夜なり風呂の小窓を風たたく　西村　英子

母という豆のごはんの力かな　中村　裕子
赤ちゃんのにぎる大空初幟　中村　昌男
有耶無耶もよしほうたる追うもよし　中山　妙子
駄々捏ねて乱す地面や七五三　中山智津子
旧道の寄木細工屋秋の風　西村　英子
むかし春着着るはひととき婆手縫い　野川木一路
供花のなき墓へひぐらし惜しみなく　陌間みどり
放課後の花の二宮金次郎　長谷川きよ志
てつぺんかけたか母また泣かせたか　畠　梅乃
道のべにきれいに咲きし紅芙蓉　濱本　主雄
大空の端に始まる夕立かな　肥後ちさこ
薫る風遠い記憶の中に入り　廣田　悦子
つくしんぼ季節の扉そっと開け　二上　光子
甘も美も与えられたるさくらんぼ　二見　和江
阿夫利峰の滅紫（けしむらさき）や鷹渡る　古屋　德男
一月のほら温室が浮いてゐる　寶子山京子
夕立よシャバダバダァと今日終る　穂坂志げる
我が胸で父が往きたる秋彼岸　牧石美千雄
やや寒やムーンロードに舟一つ　三木　泰子
ワイパーに掃かれし落花出勤す　蓑宮　わか
秋逝くや老舗蒲鉾店を閉づ　宮崎　悦女

冬薔薇やギター弾く子の指軽し　大木　敬子
隙間風無くて換気を日に三度　加藤　幾代
朝空は和紙の白さや冬はじめ　北崎　修
川底の石出て乾く懐手　守屋　まち
月冴ゆる蒼白き富士聳え立つ　來田　新子
留守電の声若き母冬の夜　大沢　年子
今が旬はうれんさうの赤旨し　片野　秋子
数へ日やタッパーに貼る料理名　小林　環
子の顔がズームに揃ふ御慶かな　近藤　絢子
銀行と寒夕焼と反射角　杉崎　せつ
梅匂ふ木象嵌の文箱かな　鳥海　壮六
日だまりに鳩のふくらむ破魔矢かな　古屋　德男
鳥声や雲押し分くる初日の出　村場　十五

◆雫の会（1・19）　重満報

初日さす我がものとなる丹沢山　井上　和子
陽炎を削って削って杜に入る　佃　悦夫
冬夕焼遠き故郷見えてくる　佐々木重満

◆無所属

注連外す陸奥（みちのく）ふつと匂ひけり　小林永以子
冬怒濤袖で窓拭く五能線　山口　千代
里の子はみな顔見知り実南天　一ノ瀬茂代

どくだみの花に埋もれる無縁墓　村上　龍山
落椿何か為残しありさうに　村場　十五
梅雨晴や光集める街並木　百川　秀子
きちきちの飛んで五間の向う岸　守屋　まち
冬木の芽まだまだいける明日がある　柳川　楊雨
風の色街の色足し聖樹かな　柳澤ミサ子
大楠の大いなる闇城の月　山口安規子
かそけくもまだも意地ある冬菫　山口　千代
函嶺の掲ぐ秋月淡きかな　山﨑　悦子
菜の花や手を振る人にふり返す　山﨑美知子
わが奥歯あつさり抜かれ白雨来る　山田　照子
バス停に残る校名夏深し　湯本とし子
吊橋のかすかにゆるる涼しさよ　吉田　百代
さざ波の尽くることなき水の秋　吉田　康雄
山吹に輝く日射岨の道　米山　翠
露草やフェイスブックに古き友　來田　新子
新藁に児の沈みたる寝息かな　若村　京子
少しだけ魔女になりたきサングラス　和田恵美子
丸窓に梅の影透く文学館　和田　瓔子
（投句一六二名）

青空へ鋏突き出すみかん狩　出澤　洋子
初電話娘家族の声嬉し　鈴木久美子
むらあやでこもひよこたま業平忌　小島ノブヨシ
婚告ぐる声のいきいき初電話　澤口　文子
お年始の厨ごと増えコロナ禍　蓑宮　わか
北風裂いて走る少年かっこいい　木村美千代
冬の太陽てんから俺は老人だった　大石　雄介
冬の雨大井丘陵罠だった　大石　和子
寒の入り背すじ伸ばせば音のして　岩楯恵津子
初日の出背のび背のびや橋の上　須田　聡子
灯油買ふ冬の銀河が落ちてきた　瀬戸　正洋
何もかも白しろ白い雪世界　石田　和代
七草やかけがえの無き君がいて　穂坂志げる
寂しさの真ん中黄色どんどの火　杉山あけみ
配達の礼に干支茶のお年玉　山田　照子
ぎこちなき肩甲骨や雪催い　岡田　典代
石蹴れば寒い音して止まりけり　田畑ヒロ子
寒夕焼包めば燃ゆるオブラート　小澤　園子

理事会日程3／11　4／8　5／13
第68回定期総会4／22いずれも木曜日午後六時から
＊緊急事態宣言の動向によって会場・時間は臨機応変に対応する。

城苑俳句・春の部

（合同句集第十二集63～78頁より近藤久江抄出）

立春や風のはじめの匂いせる　瀧本　敦子
回廊の柱のリズム梅の花　竹下由里子
春風の見ゆる窓辺や古ミシン　田下　昌人
針持てることのしあはせ針供養　田代　孝子
啓蟄や筆ゆるゆると提灯屋　田中　恵一
立春の鳩ふつくらと真珠色　田中　幸子
紙風船素材さという壊れもの　田畑ヒロ子
一灯に足るを知る日々芹の花　田渕　令子
たんぽぽを地蔵肉声にて諭す　佃　悦夫
梅ほころぶ最中の皮のもろきこと　出澤　洋子
桃の花揺れ日曜日の眠い海　寺口　成美
梅咲くや仕立しままに母の衣　寺澤　明美
鳥たちの集合離散水温るむ　徳田　公子
ひらがなの胸の名札や初桜　豊田　幸枝
躓くも踏み出す一歩花辛夷　鳥海　壮六
春風や少女すいすい一輪車　中田　笑子
三椏の花それぞれの路開く　中津川晴江
打ち込める鍬のくさびや春立てり　中根　和子
水に芯山河丸ごと春を抱く　中根登美子
立春やじぶんさがしの旅に出る　中野　文子
頬に触れ日だまりのよう猫やなぎ　中村　裕子
木々の黙ほどく水音春きざす　中村　昌男
梅一輪背骨に羽根の気配あり　中山　妙子
校章の光る襟元朝ざくら　中山智津子
春田打ゆつくり雲の流れをり　西村　英子
健やかに子の丈伸びて土筆摘む　野川木一路
梅ごちやまだ影持たぬ庭の木々　陌間みどり
耕して地球の色を裏返す　長谷川きよ志
眩しさに芯あり蝶のくる岬　畠　梅乃
針供養豆腐一丁大事にす　濱本　主雄

第74回小田原桜まつり俳句大会

投句締切　二月二十七日（土）必着

◆お詫びと訂正◆（一月号）＊今号から訂正は次のように致したくご了承ください（広報部）。

2頁　池田忠山さん7句目
（誤）甍から鳩が出初へ見構へる
（正）甍から鳩が出初へ身構へる

8頁　吉田百代さん句
（誤）茶の席のどこからともなく隙間風
（正）茶の席のどこからとなく隙間風

小田原俳句協会　〒二五〇―〇〇一二　小田原市本町二―一三―二　池田　忠山方